

マイケル・シルヴァスティン 著
小山亘／編、榎本剛士・古山宣洋・小山亘・永井那和／共訳
『記号の思想 現代言語人類学の一軌跡：シルヴァスティン論文集』
(三元社、2009年、A5判、554頁、5,500円+税)

石黒武人

マイケル・シルヴァスティン (Michael Silverstein)。日本において、彼の知見は、また彼の名前すら、当該分野の専門的な研究者以外にはほとんど知られていないのではないか。社会記号論系現代言語人類学の第一人者であるシルヴァスティン氏は、ボアズ、サピア、ウォーフとつづく人類学の系譜に、パースの記号論を取り入れたヤコブソンのコミュニケーション理論を接合し、社会文化的・歴史的コンテクストのなかで生起するコミュニケーションを動的に、そして、精緻に理解し、研究する人類学を提示してきた人物である。

彼の学知は、コミュニケーションに関わる言語構造、言語使用、社会的行為、文化的規範、権力関係など、言語学、語用論、談話分析、人類学、社会学などの諸科学において個々別々に扱われる傾向にある対象を統合的に扱う理論を備えている。そのような学知は、(1) 一回性の出来事を詳細に記述し、解釈する個性記述的研究、そして、(2) 普遍的に観察される規則性を明らかにする法則定立的研究という、さまざまな学流を二分する枠組みを統合するものである。以上の点一つをとっても、その知名度は別にして、シルヴァスティン氏の学知・思想は、人類学のみならず、言語、社会、文化、歴史、心理を研究する諸個別科学のあり方に影響を与えるものであることが想像できよう。

その氏による主要な論文が訳出された本書の登場は、日本で異文化コミュニケーション学に携わる研究者、院生にとっても重大事であるといえるだろう。スローガンとして「学際性」や「分野横断性」を標榜する異文化コミュニケーション学において、研究者、院生の多くは、諸学の知見を整合性のあるかたちで援用しつつ、ある現象や問題を全体として包括的かつ詳細にとらえようとする志向性をもつ。しかしながら、その試みは、個別科学がもつ諸前提の限定性、また、諸知見を統合する理論的枠組みの不在などのため困難をきわめ、多くの者は確固たる枠組みをもつ個別科学の理論・方法論に依拠して研究を遂行し、アカデミアにおける研究の「妥当性」や「正当性」を確保しようとする傾向にある。本書では、「全体」を希求しつつ、「個別」科学に回帰するというジレンマを乗り越え、コミュニケーション、言語、社会、文化を研究するための体系的知が示されていることから、異文化コミュニケーション学に関わる研究者、院生にとって重要な参照軸となる。

本書は以下のように構成されている。まず、論文の著者シルヴァスティン氏自身による、各論文についての説明が付された序、つぎに、シカゴ大学でシルヴァスティン氏に師事した小山亘・立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授による、約200ページにおよぶ詳細な解説（重要語彙、言語人類学の特徴、シルヴァスティンの経歴と思想的支柱、重要論文の解説、シルヴァスティン著作一覧など、以上第1章）がつづく。そのうえで、シルヴァスティン氏の四つの主要論文（第2章～第5章）が時系列的に提示され、最後に、編者のあとがきが配されて

いる。また、各論文には、それぞれの論文がどのような出版媒体に掲載され、ほかのどのような論文とともに提示されているかといった類の解説が付されており、読者は論文が書かれた当時の学問的状況などを垣間見つつ、各論文の位置づけについて推察することができる。本書に掲載されている論文は以下のとおりである。

- 第2章「転換子、言語範疇、そして文化記述」(1976)
- 第3章「言語、そしてジェンダーの文化」(1985)
- 第4章「言及指示階層の認知的含意」(1987)
- 第5章「メタ語用的ディスコースとメタ語用的機能」(1993)

まず、諸論文に通底すると考えられる根幹的内容について述べたい。シルヴァスティン氏は、コミュニケーション出来事の中心である今ここ（オリゴ）を基点として展開する、文法（言語構造）、言語使用（言及指示的語用）、ならびに社会・文化（社会指標的語用）の諸力が、過程的に、多次元的に、そして弁証法的に関与する営為を理解、説明しようとする研究を可能にする理論的枠組みについて精緻に論述している。上述した諸力（言語構造、言及指示的語用、社会指標的語用）は通常、諸学問領域において個々別々に扱われ、また、それらの間にある関係は、不明瞭のまま、もしくは、特殊なかたちでのみ扱われることが多いが、本書では、それらの関係について記号論的な見地から明示し、文法から社会文化までを統合的に扱う統一理論が示されている。そのような統一理論を提示する、密度の濃い諸論文の内容を短く伝えることは至難の技であるため、以下に、各論文について、部分的ではあるが述べ、その内容を示したい。

第2章の「転換子、言語範疇、そして文化記述」論文において、シルヴァスティン氏は、師であるヤコブソンに倣い、「転換子」という範疇を用いている。「転換子」は、一人称代名詞、二人称代名詞、指示詞、ムード、時制といった言語構造（象徴体系としての文法）に属しながら、それらが使用されるコンテキストを明示的に（透明に）指標するという性質をもつ。すなわち、転換子は、象徴的かつ指標的な「二重の記号」である。明らかに指標的なものである言語使用（語用）の存在、そして転換子がもつコンテキストをさし示す働きが示唆しているのは、従来型の言語研究で重視されてきた言語構造とそれにもとづく意味はコミュニケーション出来事を成立させる一要素にすぎない、という事実である。

シルヴァスティン氏によれば、言語には、コミュニケーション出来事において、なにかしらをさし示す言及指示的な働きに加え、社会的アイデンティティや権力関係などを指標する非・言及指示的指標（社会指標的）作用がある。また、言及指示的な範疇と非・言及指示的な範疇は、コミュニケーション出来事の中心であるオリゴ（今・ここ）を基点にし、その指標性の大小にもとづいて階層化、序列化されている。したがって、言及指示的指標と非・言及指示的指標が形成する全体をとらえる射程が、言語、コミュニケーションを社会、文化との関係でとらえ、社会、文化を言語、コミュニケーションをもとに記述し、分析、説明するために必要であるというのである。

この射程の広さは、パースの記号論における指標記号、類像記号、象徴記号という記号論的様態の全体をとらえる宇宙誌的見方をもとにしている。したがって、構造主義者たちによってなされてきた営み、つまり、象徴レヴェルの構造に焦点をあて、社会、文化をとらえるという仕方だけではなく、社会文化的、歴史的にコンテクスト化された語用、コミュニケーション（社会文化的実践）のレヴェル、すなわち指標のレヴェルで社会、文化をとらえる枠組みが示されている。

周知のように、諸科学において、社会、文化をミクロ場面で刻々と生成（指標）され、変容するものととらえるか、それともよりマクロな構造（象徴）としてとらえるかという議論があるが、シルヴァスティン氏の言語人類学はそれらを統合する。

第3章の「言語、そしてジェンダーの文化」では、言語構造、言語使用、ならびに言語使用者のイデオロギー（意識）が相互に作用し、言語構造、言語使用、社会文化を歴史的に変容させる、という弁証法的なメカニズムについて論証されている。たとえば、近・現代の男女平等イデオロギーをもとにした「ポリティカル・コレクトネス」という規範の影響下、人びとが中和化された名詞、照応代名詞などを用いるという言語実践は、じつは、ジェンダーの言語表現をめぐる言及指示の体系（言語構造）、語用の体系、そして、イデオロギーが衝突する過程で、通時的に形成されてきたものであり、その衝突が現在も進行中であるということを明示的にとらえるための枠組みが本論文では示されている。この枠組みに依拠し、17世紀イングランドにおける英語の二人称代名詞の用法に関してなされた分析では、イデオロギーによって用語法が歴史的に「歪曲」され、変容する過程が鮮やかに例証されている。

第4章「言及指示階層の認知的含意」では、シルヴァスティン氏が発見した「名詞句階層」について詳説されている。氏によれば、名詞句範疇は、コミュニケーション出来事が起こっている中心に位置するオリゴを基点とした指標性の大小、つまり、コンテキストをさし示す度合いの大小という原理に則って、一人称代名詞から抽象名詞まで序列化されている。本章では、この序列化された名詞句範疇が形成する言及指示空間とその記号論的な様態が丁寧に解説されている。そのうえで、言及指示の部分的構成要素に焦点化し、それを民族心理的、ステレオタイプ的に解釈し、個人の認知過程と結びつけるかたちで概念形成をしてきた心理学、さらには、「世界」を言語を介して記述、解釈してきた哲学などの諸学は、言及指示空間の記号論的様態がもつ動態、複雑さを無視し、単純化したかたちでとらえてきた、と批判的に述べられている。シルヴァスティン氏は、コミュニケーション出来事を中核に据え、その中心を基点に階層化、序列化されたさまざまな記号論的様態全体との関係で営まれる人びとの認知活動、世界記述・解釈のあり方を理解することが、認知心理学的な過程（内的過程）の理解と説明を志向する研究の出発点となることを示唆している。

第5章「メタ語用的ディスコースとメタ語用的機能」では、コミュニケーション出来事において、さまざまな意味に解釈されうる指標的記号（語用）に、解釈可能な枠組み（フレーム）を与えたる、統制したり、規定したりする「メタ語用」の機能について詳説され、語用がメタ語用との関係においてテクスト化、再テクスト化される動態が示されている。シルヴァスティン氏の思想は、語用とメタ語用が記号論的空間で織りなす関係全体を射程とし、その関係を「ディスコース相互行為」、「相互行為のテクスト」、「言及指示的テクスト」、「較正」といった概念群を用いて包括的かつ精緻に理論化している。メタ語用的機能についての理論的理説は、メタ・レヴェルに関する、より体系だった分析をうながし、同時に、学術世界における研究者の営み自体に対する再帰的な批判意識が不可欠であることを認識させる。

本書に掲載された四つの論文は、1970年代中頃から1990年代初めにかけて書かれたものである。これらの論文を2000年代の日本において「訳出」するという作業自体を、社会記号論系言語人類学の視点からみると、本書でも編者によって言及されているように、多様な読者を想定し、かつ、難解な内容をわかりやすく示そうとする意図も含め、複数の「メタ語用（相互行為のテクスト）」が介在する困難なものであったことは想像に難くない。とはいえ、社会、文化、歴史とは不可分な言語的事実全体、すなわち、記号論的事実全体を緻密に理論化し、その様態を明

らかにしようとするシルヴァスティン氏の強烈なまでの「分析への意志」(p. 65) が本書で示された翻訳とその解説には十全に反映されている。上述してきた諸論文の内容をふまえれば、シルヴァスティン氏の思想が、異文化コミュニケーション学に携わる者にとって、一つの重要な導きの糸となることが推察できよう。

参考文献

- 小山亘 (2008). 『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』三元社.
小山亘 (2008). 「Origo」『月刊 言語』第37巻、第5号、30-35頁.